

---

# 子守唄の配達人

麻生柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

子守唄の配達人

### 【Zコード】

Z5996M

### 【作者名】

麻生柚葉

### 【あらすじ】

素敵な素敵な子守唄を届けましょう。 おやすみなさい。 良い夢を。

夜毎に子守唄の配達人は子守唄の結晶を届けに夜空を飛びます。 多数の色を持ち、それぞれ違う種類の夢を持つ子守唄の結晶。

今宵、貴方は何色の夢が見たいですか？

## Story01：鳴り響く夜のベルカント

「待つてくださいああああい！」

真ん丸の月が輝く夜空に情けない声が響きます。

「置いていかないでくださいああーーいいい！－」

こんなに綺麗な夜なのに、声の主の少年は今にも泣き出しちゃうです。

そんな声を哀れに思つたのか、少し先を飛んでいた夢誘いの子は突然振り向いて言いました。

「僕たちの仕事は？」

「人間に子守唄を届けて素敵な夢に誘つ事ですう・・・」

そう、彼らは眠ろうとしている人の所に行き、素敵な夢が見れるよう子守唄を届ける配達人。

ベッドの中、うとうとしている時に近づいてそつと枕元に子守唄の結晶を置いていきます。

その子守唄を聞きながら眠つた人間は、とっても素敵な夢の世界に行くことが出来るのです。

人間の数が多くて、毎日は届けてあげられないけれど

沢山の人に、夢を見てもらおうと子守唄の配達人は毎日空を飛び回っています。

夢は毎日必ず見れるものでは無いでしょう？

だから、貴方が夢を見た日は子守唄の配達人が枕元にそっと子守唄の結晶を置いていった日なのですよ。

知らなかつたでしょ？

彼らの姿は見えません。

夢うつつの時に流れる優しい子守唄のメロディーを朝まで覚えてる人は居ません。

だから彼らの事は誰も知りません。

そして誰も知られてないので良いお仕事をしても感謝されません。

だけれど彼らは人に幸せになつてもらおうと今日も子守唄を届けに行きます。

「こんなに夜も更けちゃつて・・・遅刻してどうするんだよ。この寝坊魔。」

「うわーん！ そう言わないでくださいー。

最近の人間は夜更かしですー。きっとまだ起きてますよう。」

見る見るうちに少年は涙目になり、今にも涙が零れ落ちしそうです。

「はあ・・・」

「つー」

「ほら、早く行くよ。まだ間に合つかもしれないでしょ？」

「はいですつー！」

夢誘いの子が呆れた様にフォローすると、少年は輝かんばかりの笑

顔になりました。

鳴り響く夜のベルカント  
聞こえてくるのは美しい歌声

## Story01：鳴り響く夜のベルカント（後書き）

この小説はこの先「*Fantastic Syndrome*」とリンクしている部分があります。先に「*Fantastic Syndrome*」を読んだ方が分りやすいかも。

## Story02 : 散りばめられた、沢山の奇跡を

今回は、子守唄の結晶のお話をしましょう

夢誘いの子はとつても綺麗な声で、歌を唄います。

優しい優しい子守唄

その歌声は沢山のものを魅了し、聞いている人をとても幸せな気分にさせてくれるのです。

そんな素敵な子守唄を、拾つて集めてボウルに入れたら  
こねて、小さく丸めて、並べたらオーブンで十五分間焼き上げます。

作り方を知つていれば、実はとつても作るのは簡単なんです。  
あれ？

お菓子作りみたいつて思いました？

だけど、食べたら美味しくは無いんですよ

焼きあがつた物を『子守唄の結晶』 そう呼んでいます。

色は様々あつて、こねてる間はみんな同じ色なのに、焼いている内  
に色が変わっちゃうんです。

赤に水色、桃色に黄色・・・

見落としがちですが、実は透明な色の結晶もあるんですよ。  
色それぞれに夢の意味があるんですよ。

そして、特別な夢が一つだけ

夢誘いの子が、真ん丸満月のお田田を半月の形にしながら歌つて作る子守唄の結晶は  
どんなに沢山作つても全部橙色になるんですよ。  
これだけは、特別なんです。

「今日も綺麗に焼けたのです！」

「あのねえ、それが僕たちの仕事なんだ。当たり前でしょ？」

良い仕事しました！

とでも言わんばかりに、焼きあがつた結晶を前に配達人・オルシスは胸を張ります。

それに呆れながら答えるのは夢誘いの子・ソソ

「ソソくんそんな事、言わないでくださいよー。」

「これでも、ボクは一生懸命作つてるんです。」

「はいはい。分かったから。早く詰めちゃつて」

「はあーいー！」

そんな風に作られた沢山の結晶を鞄に詰めて今日も配達行つてきます。

散りばめられた、沢山の奇跡を見る事ができるのは、そう、貴方



## Story03：彼の者の言の葉は高らかに鳴り響く

子守唄の配達人

沢山の子守唄の結晶を持つて、夢への誘いの為に子守唄を届けます。それは、世界を超えて時空を越えてどんな所にだつて届けに行くのです。

貴方はどんな夢が見たいですか？

何色の子守唄の結晶が欲しいですか？

「うひゅー、今日最初に届けるのはこれですかあ・・・」「こひ、オルシス。最初なんだからシャキツとするー。」

さてさて、空を飛びながら仕事について話す一人  
その手には赤色の子守唄の結晶がありました。

「赤色ですかあ。うひゅ、苦手なのです。」

「あのね、お前が夢に行く訳じやないんだから」

「それでもー、苦手なものは苦手なんですぅ。  
テンペスタさんは、声が大きくて怖いんですよ。」

オルシスは半泣きの状態でソソに訴えます。

対するソソは呆れ顔

「全く、彼には会わないだろ？」

「そうなんですか？」

「べつてないで、さつとと行くよ。」

「ひやうーはいですー。」

配達先は、苦渋の選択に迫られて悩み続いているあの子  
苦しくて苦しくて、一人枕を濡らしながら迷い続ける羊飼いの女  
の子

ふわりと静かに地上に下りて、そんな少女の下へ  
付近には鬱蒼とした森が広がり、それに呑まれると錯覚されてしま  
いそうなほど小さな小屋と羊が一匹も居ない牧場がありました。

寂れた部屋で少女は一人ベッドに入る事無く、倒れるように蹲つて  
います。

傍に居た犬が一瞬ピクリと反応しましたが、そのまま気づく事無く  
スヤスヤ眠っていました。

夢うつつの少女の頬にはキラリと光る涙の跡

「選択は、結局自分で決断しなくてはいけないけれど  
誰かにこれで良いよと言つて欲しくなる時もあるよね  
誰かの意見を聞きたくなる時もあるよね  
だから、手伝つてあげます。」

一人で抱え込むだけじゃ、先は見えやしないから

投げ出しあや、駄田だよ。逃げ出しあや、駄田だよ。  
最後に決めるのはキリ血ぬなんだ。

だから、お休み。どうか良い夢を・・・。」

子守歌の結晶は赤く輝き、そしてカラカラと消えていった

彼の者の上の葉せぬかに鳴り響く  
赤色の結晶は靈夢への勧告

黄緑の結晶を片手にオルシスは布団に入つた青年を見下ろしていました。

容貌は細面、透けるような白い肌、色素の薄い髪。  
しかし、それはどこか頼りなさ氣で貧弱でした。

「本当に、それ配達して良いの？」

不安そうな顔をして、傍に居たソソはオルシスに聞きました。

「うん。彼なら大丈夫だと思うから。」

「・・・キミも、そう思つでしょ？」

オルシスは虚空に視線を向けると問いかけました。  
オルシスとソソ、二人だけしか居ないはずの空間に向かって  
さも、当たり前に・・・

『クスクス、そうねエ。妾も大丈夫だと思つワ。』

何処からともなく、女性の声が聞こえました。  
深く、そして唄う様な声

灯りは消され、光は殆ど無いはずの部屋に異様に映る黒い影

それは、自我を持ち、形を持ち、確かに存在を持つて  
例えるなら、そつ・・・怪異

『いの子はいの見えて、案外頑丈なのよ。  
最後には道を見つけてくれるワ・・・』

彼女は晒う、闇を深くして  
樂しそうに、嬉しそうに・・・

「・・・心十葉嬢によろしく伝えておいてください。」

『分かったワ。配達人サン。』

「現実を夢はどこか繋がつていて、紙一重だ  
だからこそ、境目が分からなくなつて道を見失つてしまつ  
現実か、夢か悩む事だろう。苦しむ事もあるだろう。  
だけどキミならば、その先に気づいて  
新しい道に進めると思うから・・・

「お休み。どうか良い夢を」

黄緑の光は影もろ共すべてを飲み込みそして・・・

蝶と影が晒うその先に

黄緑の結晶は胡蝶の夢への道標

「ねえ、オルシス・・・  
「何ですかあ？」

「いつも思つてたんだけど。それ、どうにかならないの？」「それ・・・ですかー？」

眉を寄せるソソにオルシスは訳がわかりませんでした。  
首を傾げてみても、思いつきません

「それだよ、その間延びした喋り方！

どうして仕事の時は真面目に喋るのに、すぐそんな喋り方になる  
の？」「

「えー、だつてずっとお仕事モードだと疲れるじゃないですか  
それに、お仕事は真面目にやうなくちやダメでしょ？  
公私混同はしないんですーー！」

「今は、仕事に入らないの？」  
「移動中は除外なのです」

はあ、と一つソソはため息をつきました。

別にその喋り方を咎めている訳ではありません。

オルシスの知り合いはオルシスをいつも言つ喋り方だと一つの個性と  
して捕らえています。

勿論、ソソもその一人なのですがお仕事モードを見る事が出来るの

がパートナーであるソソだけなので  
そのギャップに何とも疑問を持つてしまつのです。

「はあ・・・」

「何ですかあ、そのため息は！」

失礼じやな・・・つ！」

「ん？」

「あつ、ひじひあ・！」

オルシスの言葉を遮つて、鞄から飛び出してきたのは黄色い結晶  
見せ付けるように一度キラリと光ると、捕まえようとするオルシス  
の手をすり抜け勝手に飛んで行つてしまつました。

「ああー！」

「また、紛れ込んでたんだね・・・あの結晶」

黄色い結晶はお転婆すぎて勝手に夢を見せに行つてしまつます。  
だから、二人は黄色の結晶は鞄に入れないよつにしているのですが  
いつも上手く鞄に潜んでは、外に出よつとするのです。

本当に、困つた結晶です。

「はうー」

「まあ、仕方ないさ。いつもの事だろ」

彼女はお転婆で悪戯っ子だから、日中にも関わらず夢を見せてはそ  
れを楽しんでいます。

黄色い結晶を見つければ要注意！

・・・まあ、そつは言つても結晶が見える人はそう居ないのですが

やれやれと、二人して肩を落とすと氣を取り直してまた配達を続けるのでした。

お転婆娘の放浪奇譚

黄色の結晶は白昼夢への兆し

「お願いします。私に青色の結晶をください。」

「ソロラちゃんー？」

急にどうしたんですかあ？？？」

「お願いします。お願いします。

青色の結晶をください。」

土下座しそうな勢いで、ソロラと呼ばれた少女はオルシスに頼み込みました。

「わあー、ボクは構わないのですけど

青色は人を選ぶから、ソロラちゃんじや夢見れないですよ」

「使うのは私じゃないんです。

ネガイボシにその夢を願われた人の為にです。」

彼女は星の子

ネガイボシに願つたお願い事をネガイボシの力を使って叶えてくれる少女。

「ええー、でもう・・・」

「良いじゃないか、あげれば

「お願いします！」

オルシスは迷います。

何故なら、この青色の子守唄の結晶はどの夢よりも性質が悪いから

です。

青い青い綺麗な色をした、ビックのかほのかに薔薇の香りのする結晶

です。

「そこまで言つなり、まあ良いや。はい。」

「ありがとうござりますーーー。」

ソロラはしきりに頭を下げました。

嬉しそうに両手でしつかりと青色の結晶を受け取ると  
ソロラの手に収まつた瞬間まるで、嬉しことでも思ひ出せば  
る様な薔薇の匂い

その香りにソソは眉を顰めました。

その様子に気づく事無く、もう一度ありがとうござましたと  
そう言つてソロラは踵を返していきました。

\* + \* + \* + \* +

「ルカ……だつたつけ？」

「そうだね」

「醒めない夢なのに、一回醒めたんだよねえ。」

「うん。彼女が気に入つたのに、一度手放した貴重な存在だと思つ  
てたんだけど……」

「結局、ドルチーハちゃんの手元に戻つていいくみたいだねー」

醒めない夢は、人を選ぶ

お気に入りの人を見つければ、夢へ誘い込み“夢の世界へ”連れて行ってしまいます。

「でも彼なら、“夢”になれる気がするよ  
ソソくん、空いてた夢つてあつたけ？」

「うーんと、初夢に過去夢とか、後、予知夢も居なかつたような…

・

「じゃ、その辺になれるのかなー。」

「あれだけドルチェに気に入られてるんだ。必ずなるでしょ。」

役回りをつけて気に入った人は手元に置く  
夢の総括である彼女だから出来る事  
ルカもその内、その仲間に入ることでしょう  
今夢を司つてる人達も元はといえば、元人間の人たちばかりなので  
すから

「久しぶりに“夢”的お仲間、増えそうですねえ。ちょっと楽しみ  
ですー」

「そうだね。」

そう言って、一人は笑いました。

むせ返るような薔薇の匂いに

青色の結晶は醒める事の無い深い夢へのお誘い



透明

それは、色を持たない結晶

翳せばその先が見え、時にその存在が忘れ去られてしまうような色だけどね、それは貴方次第で何色にも染まるんです。  
それだつて一つの個性で列記とした一つの色だと思いませんか？  
色が無いと嘆く彼に、どうか貴方の手で色を想像してあげてください。

「彼らは難儀な性格をしそぎなのですうー」

「仕方ないよ、言つたつて直らないんだから。」

掌の上で転がされている結晶は、手の色を映していました。

「“彼は一つの彼として存在している”何で気づかないのかなー  
何か他の代わりでは無い。  
いくら似ていようが、影響されようが、“個は個”でしかないの  
ですう」

ポーンと結晶を空に放ると空の色になりました。

お届け先は可哀想なうさぎの人形

自分を彼の人の映し身だと考えて、自分の存在を一つの個として捉えられない人

嘆き、否定して、だけど自分の居場所を探し続けている人

「深く、考える必要は無いんだよ。

“キミはキミでしかありえない”

そして“他の何者でも無い”

キミはたつた一つの個として存在しているのだから。

だから、気づいて。キミの色に

案外似た者の彼との夢に何か切片が挿めると良いね

お休みなさい、良い夢を・・・」

透明な結晶はキラキラと沢山の色に輝きながら煌いて  
夜空から、うさぎの元へ降り注いだのでした。

どうか俺に色をください

透明の結晶は明晰夢の主張

## Story 08 : 正しく、眞実、そして始まり

少年は、一人の妖精の少女に出会いました。

悪戯好きな可愛い可愛い妖精さん

嬉しそうな顔で、少年の歌を聞いてくれる妖精さん

だけどね、その妖精さんは少年の大切な“歌声”に盗んで行つてしまつたの

「シユシユちゃん？」

「どうしたの？」

「結晶がチカチカするのですー」

「あつ、ホントだ・・・」

桃色の結晶は一人の行く手を阻むように点滅を繰り返しました。

チカチカ、チカチカ

まるで駄々を捏ねるように

まるで行きたくないと言つ様に・・・

それに呼応するように、鞄の中の水色の結晶も飛び出して一人の目の前で点滅しました。

チカチカ、ちかちか、チカチカ、ちかちか

桃色、水色、桃色、水色・・・

「どうするの？」

「予定を変更するです。」

桃色の結晶はお届け先は、歌うたいの少年の下へーーー

オルシスの言葉に、満足！とでも言つよつに桃色の結晶は大人しくなり、水色の結晶も静かになりました。

声を失くした歌うたい

大好きな町を離れて一人、“歌声”を探して旅の途中  
鬱蒼と茂る森の片隅で消え入りそうな火の傍で眠りにつこうとして  
いました。

「良かつたね、キミはとても幸せ者だよ。

これから見る夢は“真実”、嘘偽りは一つも無い  
全てが、本当の事。だから、信じてあげて。

この子の意思を無駄にしないであげてね。

お休みなさい、良い夢を・・・」

だけどね、最後にはちゃんと少年の下に歌声が戻つてくるのでした。

正しく、 真実、 そして始まり  
桃色の結晶は正夢の警告

妖精さんは素敵な素敵な宝物を見つけました。

とつても、暖かく幸せを運んでくれる素敵な歌声

妖精さんはうつとりとその歌声に聞き入ると

大切に大切に宝箱にしまつて鍵をかけたのでした。

「さじをじ、そつすると水色の結晶のお届け先は—  
妖精さんの所で良いんですよねえ」

まるで会話をするように、結晶に話しかけると  
それに答えるように結晶は淡く光りました。

「良かつたの？ オルシス。

予定とは逆の子守唄を届けちゃつて。」

「大丈夫ですよ

それに珍しく、この一人が我慢言つたんですね。叶えてあげたくな  
るじゃないですかー」

「珍しく？ そんな事は無いだろ？

君はこの一人に甘すぎだよ。」

「やつですか？」

「 セウだよ 」

「 うーん。難しいですー。 」

ありがとうございました、とでも言つようすに水色の結晶がパツと輝きました。  
その先に居るその子も喜んでいる事でしょう。

悪戯大好きな妖精さん

今日も大好きな“歌”が聞けてとつても嬉しそう  
枕元に大切な“歌声”の入った宝箱を置いて、眠りにつこうとする  
その姿はどこか幸せそうでした。

「 それは、キミにとつての宝物かもしれないけど、彼にとつても本  
当に大切なものなんだよ。 」

これから見る夢は“反転”、全く逆さま嘘つきな夢  
だけど、それはキミの願うとおりの夢だから。  
夢の中だけでも、キミの思うとおりに・・・

お休みなさい、良い夢を・・・ 」

そして、その宝箱は決して開く事はなく妖精さんの宝物であり続け  
るのでした。

逆さま、反転、そして終わり  
水色の結晶は逆夢の愛情

## Story10：それはきっと恋焦がれた予感

「あれあれえ！ソソくん見てください。結晶の色が変わりましたー」

「あっ、ホントだ茶色になつたね。」

結晶を月明かりに照らしてみると、深い茶の色がありました。

焼く前と、焼く後の色が変わらなかつた子守唄の結晶

それは、“夢を司る人”がいない事を表していて欠番を意味してい  
たのだけれど・・・

「茶色・・・ルカくんだね。初めましての方が良いのかなあ？

よろしくね。」

「本人じやなくて、結晶に挨拶するのも辺だけど・・・  
まあ、よろしく。」

決して本人では無いけれど、その先は彼の元へと繋がつてはいるの  
です。

茶色い結晶は答えるように小さく震えました。

「さあて、お届け先は・・・わあ！天界ですよ。」

「へえ、面白いね。しかも、稀に見る“予知夢”が見れる天使だな  
んて」

予知夢は見る事が出来る人が限られている狭き門  
とは言つても、青色の結晶には負けますが・・・

そして、実は橙色の結晶の次に嫌われてしまつ結晶

「でも、選択肢は他にもあつたはずなのに、あえて“予知夢”を選ぶなんてね」

「ボクは好きですよ。予知夢ー」

「僕達に嫌いな夢は無いでしちゃうが。

その他大勢の話だよ。予知夢もまた誤解されやすい夢の一つだか

ら

「そりなんですけど」

その分大勢ではなく個人に好きだと言つてくれる人がたつぱり愛してもらえますから  
良いんじゃないですかあ？」

沢山の人に愛される存在も良いが、特定の人に深く愛される存在と言つのも  
中々、乙なものでしょ？

天界の外れの外れ、忘れされれそうな場所に立つ家で一人寂しく眠る彼  
眠るのが怖いのでしょうか  
少し、目の下に隈を作りながら横になる姿はどこか痛々しく辛そうでした。

「確かに、先を見る事は生きていいくにはつまらない  
だけじね、デメリットだけじゃないんだよ。  
ちゃんと、キミにとつての良い事も沢山あるはずだから  
拒絕しないで、目を背けないで  
しつかりと彼の願いを受け取つてあげてください。  
伝えたい事があるから、彼は先を見せるんです  
お休み、どうか良い夢を見てください。」

それはきっと恋焦がれた予感  
茶色の結晶は予知夢の願い

これから お話するのは 誤解されがちな 夢の形  
作り方の違う特別な橙色の子守唄の結晶

とある マンションの一室

ちいさな こねこが ベッドの中で うとうと していました。  
かわいい かわいい ちいさな こねこ  
だいすきな 人と いっしょに いれて とっても しあわせそう

「ホントにホントに、この子に橙色で良いの？」

不安そうにソソはオルシスに問いかかけました。

「良いんですね。」この子だからこそ、橙色なんですね  
「決めるのはオルシスだから、僕は何とも言えないけどさ・・・」

この幸せそうな顔を、悲しみに染めるのは可哀相だとソソは思つてしましました。

橙色が見せるのは、恐ろしい“悪夢”  
人によつて何を見るかは様々ですが、それは恐怖に彩られとても恐  
ろしい  
“悪夢”を好きになる人なんているのでしょうか？

「人は悪夢を見るからこそ、どれだけ現実が幸せなものか知ること  
が出来るんです」

悪夢は、本当は一番に愛されても良い夢なんですよ。」「  
「そうだけどさ、それを理解出来る人間がどれだけ少ないと思つて  
るの？」

まして、この子はまだまだ小さい子供です。

怖い夢を見たら、恐ろしくて泣いてしまうでしょう

「この子は夢の後に気づきます。

自分は今幸せの中にいるんだと自覚できます。だから大丈夫。  
今は無理でも、この子は将来“悪夢”に感謝する日が来ます。」

しあわせそうに ねむる こねこに たくさんの ねがいを こめて  
こもりうたの はいたつにんは そつと こねこの あたまを な  
でたのでした

「怖い怖い夢だけど、悪夢があるから

今、目の前にある当たり前の幸せに気づく事ができるんです。  
だから、悪夢の彼をどうか嫌わないであげてください。  
彼の不器用な思いを見つけ出してあげてください。

「おやすみ いい夢を見てね」

幸せの為の素敵な夢を

橙色の結晶と悪夢の悲鳴

ポロン、ポロン

ポロ、ポロン

お空に浮かんでいるのは、お月様とお星様だけ  
そう勘違いしていませんか？

実はね、お空にはもっと沢山のものが浮かんでいるんですよ  
その一つがこれ

ポロン、ポロロン

弾くと綺麗な音がする不思議な弦

一人一人長さも違うし、奏でる音も違つんですね  
こう見えて生き物なんですよ？  
弦の先には頭も付いていますから、ちゃんと喋れます

星が輝く夜に活動する人達は、弦の上をわざと踏んで音を出したり  
してゐるんです。

勿論、子守唄の配達人もその一人  
だけど、彼はドジだから上手く綺麗な音が出せないのですが・・・  
一見、静かに見える夜の空は、本当は沢山の音楽に溢れているんです。

ポロン、ポロン

「あ、ユシアくんだー」

久しぶりだね

ユシアと呼ばれた彼は、華麗に星空を舞い飛んできました。

ホロロン

「今では奇麗な壁紙がいいの？」

「んーん、これから行く所だよ。」

ユシアは『星集め』と呼ばれる人です。流れの星を捕まえてアクセサリーにするのが得意で、彼自身も沢山の加工された星をお洒落に身に着けるんですよ。

オルシスも貰つた事があるのですが、実は失くしてしまいました。  
ヨシアには内緒にしてますけど

「おーい、俺の事忘れるなよお」

後から飛んできたのは、一匹の弦の子

弦の先に特性の星のアクセサリーを付けていて、他の子とは少し違つようです。

「ああ、『じめん』『じめん』。いつかりしてた。」

コシアはケラケラ笑い、文句を言つた弦は不貞腐れています。

「シドくんも、こんばんわーです。」

「ね、こんばんわあ。」

「ねうだ、オルシス今日の仕事終わりか?」

「? そうですよう」

良い事を思ついた!とばかりにコシアは笑いました。  
オルシスが前々から星集めについて興味があると聞いていたし、  
それに集めた星で作ったアクセサリーをオルシスがとつぐの昔に失  
くしている事をコシアは知つていたのです。  
そうしてまた楽しそうに笑うのでした。

「お前も一緒におりでよ。あっちで流星群が来そうなんだ。星を捕  
まえるチャンスだよ」

「じゃあ、じゃあーボクも星捕まえられたら、アクセサリーくれま  
すか?」

予想通りのオルシスの答えに、コシアは心底面白うに笑います。

「良いよ、どうぞ作りの作つてあげる。」

「やつたあー!」

そう言つてコシアはまた違う弦を踏みながら、星空を覗けてこきま  
す。

そんな彼の後を監して追つていきました。

星空飛行とピチカート  
今日もお仕事お疲れ様でした

## Last Story : 子守唄の配達人

貴方は何色の子守唄の結晶が欲しくなりました？

どの色の結晶を貰えるかは、貴方には決められませんが  
貴方が心の底から願えば、きっと子守唄の配達人が素敵な夢を届けてくれるでしょう。

中には、意地悪な夢も怖い夢も哀しい夢も  
反対に、幸せな夢の楽しい夢も・・・  
沢山の夢の形があるけれど

どれもこれも、素敵な夢ばかりなんです。

だからどうか、夢達を一つ一つ覚えていて上げてください。

みんな、貴方の為に貴方の事を思つて夢の世界に導いているのです。

そして忘れないであげてください

貴方の幸せを願つて誰にも知られることなく駆け回つている人が居るということを

今日は素敵な夢は見れましたか？

朝、目が覚めて夢の事を覚えていたらそれは昨晩に子守唄の配達人が子守唄を届けてくれた確かな証拠

ありがとうございました、一言お礼を言つてあげてください。

夢達も、子守唄の配達人もきっと喜んでくれるでしょう。

子守唄の配達人

彼らは眠ろうとしている人の所に行き、素敵な夢が見れるように子

守唄を届ける配達人

今日も彼らは誰にも知られることなく、幸せを届けに走ります。

お休みなさい。良い夢を

今日は、貴方の所にも訪れると良いですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5996m/>

---

子守唄の配達人

2010年10月15日22時47分発行